

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより

第4号

2017(平成29)年4月26日

(代表 梅田正之 090-5042-7775)

線であることの大切さ — 技術の伝承 —

知っている（わかっている）者にとっては何でもない、きわめて当たり前のことが、知らない（わからない）者にとってはなかなかうまく飲み込めないということが、とくに技術の伝承においてはよくあるように思います。たとえば、「機結び（はたむすび）」もその一つです。機織りをしている最中に糸が切れた場合、「機結び（はたむすび）」と呼ばれる結び方で糸をつなぎますが、これが簡単なようで難しいのです。丁寧に説明をしてもらい、目の前で実演してもらっても、一度では理解することができません。図で示してもらって「わかった」つもりになっても、いざ自分一人でしてみると、うまくいきません。できるようになれば、ほんとうに何でもないことなのですが、何度も何度も目の前で繰り返し実演してもらい、手ほどきをうけて、繰り返し復習して初めて身につくものであるように思います。「方法は間違っていないけれども、うまく結べる時と、すぐに抜けてしまう場合がある」などということは経験者から直接聞いて初めて納得できる話です。

京都府精華町のけいはんな記念公園内に「相楽木綿伝承館（さがなかもめんてんしょうかん）」があります。明治以降に、いち早く紡績糸を取り入れ、化学染料を用いて鮮やかに染めた糸を織り込み、オシャレな木綿織物として名を馳せた「相楽木綿」の技術の伝承と普及に取り組んでおられる活動体です。

代表の方のお話によれば、相楽木綿の技術について聞き取り調査を開始した頃には、かろうじてお一人だけ、「相楽木綿」の機織りを実際に経験しておられた方がおられたそうです。そして、幸いなことには、実際の作業を間近で見ておられた方がまだ他にもおられたそうです。その方々からの聞き取りは相楽木綿にとってはバイブルのようなものであり、その話をつなぎ合わせることで、謎とされていた工程の一つ（緋の括り糸を一本の糸で行う技術）を明らかにすることができた、とおっしゃっておられました。もし、聞き取り調査が10年遅れていたら、永遠に謎のままになっていたかもしれません。

技術の伝承は線であることが大切です。一度途切れてしまったものを復元するのは容易ではありません。たとえどんなに細くても、まずはとにかくつながっていることが何より大切になります。

大和機（やまとばた）という機織り機があります。近世初頭からおもに大和で用いられていたと考えられている機織り機です。経糸の張力が弱いのが特徴で、うまく織りこなせば絶妙な風合いの織物ができるのですが、織りこなせるようになるにはそれなりの熟練した技が求められます。今の手織り機はそれを簡便にした改良機がおもに用いられているとのこと。

相楽木綿伝承館では、かつての大和機の技術の伝承にも取り組んでおられます。ぜひその技を身につけたくて、4月から「機織り教室—ちよんこ機初級コース」に通いはじめました。いよいよこれからです！写真は相楽木綿伝承館にある大和機→



----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】（問い合わせ件数 平成29年3月26日～平成29年4月25日）

秋田県1、群馬県1、埼玉県1、東京都2、神奈川県2、石川県1、岐阜県1、静岡県1、三重県2、滋賀県1、京都府3、大阪府1、兵庫県1、奈良県1、島根県1、鹿児島県1、沖縄県1

【H.A.M.A.木綿庵】（平成29年3月26日～平成29年4月25日）

メールを含む各種相談件数4、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数1件2名



《綿の歴史》 — その3 大和（奈良県）における綿作り — 木綿庵1号畑パネルより

大和国（奈良県）では、安土桃山時代の元亀・天正頃（16世紀後半）からすでに綿栽培が盛んに行われていたことが文献の上からもはっきりとしています。江戸時代初期に成立した『毛吹草』（1645年刊）という書物の中でも、大和の名物として早くも「郡山（大和郡山）の繰綿」が取り上げられています。畿内では、その後、河内、和泉、摂津が綿花栽培、紡績、織布の先進地帯として発展していくこととなりますが、大和地方もそれらと並ぶ綿の産地として展開していくこととなります。

ところで、大和で綿作がいち早く行われるようになった背景には、農業用水の慢性的な不足があったと考えられています。雨の少ない奈良盆地では水田のすべてに稲を植えると農業用水が不足するため、その解決策として用水をあまり必要としない綿と、用水を大量に必要とする稲とを一年ごとに交代で植え付けるという工夫がなされたのです。

江戸時代後半以降、溜め池などの灌漑施設が整うようになるにつれて、綿の作付け面積は全体としては減少していきませんが、明治時代になって外国産の安価で良質の綿糸、綿花が入ってくるまで綿作はつづき、自給用の綿作まで含めると昭和のはじめ頃（終戦前）まで、この辺り一帯、天理市内でもあちこちで綿畑を見ることができた、ということです。

【綿の加工の作業記録】（梅田1人の作業量）

・糸車を用いての糸紡ぎ量（洋綿）

3月26日～4月25日（作業実日数28日） 糸の総量121.3g（32.35匁） 総時間350分（5時間50分）

※1分間≒0.347g 1時間≒21g（5.6匁）

【機織り機を譲っていただく】

平成29年3月27日（月）、京都府向日市在住の方より、旧式の高機を譲っていただくことができました。以前は奈良県田原本町にお住まいの方が所有されていた機織り機だそうです。部材に「奈良、押上町、はた木」という刻印があり、一部改修、改造された形跡が認められます。現在は普通の高機のように見えますが、元来は大和機であった可能性も考えられます。

【ワークショップ】 — 綿に親しむ：綿繰り、糸紡ぎをしてみましよう — を担当

平成29年4月15日（土）午後1時30分～3時 天理大学附属天理参考館にて開催

定員10名に対して、事前申し込み参加者10名のほか、見学者5名の参加をいただきました。

綿繰り、綿打ち（唐弓、竹弓）、糸紡ぎ（糸車、手作りスピンドル）を体験していただきました。

【研修等の記録】

- ・平成29年3月27日 京都府向日市へ機織り機を受け取りに行く
- ・平成29年3月28日 「西陣織会館」（京都市上京区西堀川通り）を訪問、見学
- ・平成29年3月28日 「小森虎機料株式会社（機織り具専門店）」（京都市北区紫野）を訪問、相談。
- ・平成29年3月28日 「吉田機料製作所（機大工）」（京都市北区紫野）を訪問、相談。
- ・平成29年4月 9日 「相楽木綿伝承館：機織り教室初級コース①」（京都府相楽郡精華町）受講
- ・平成29年4月23日 「相楽木綿伝承館：機織り教室初級コース②」（京都府相楽郡精華町）受講

【以下の写真は、軽トラックで運ばれてきたばかりの機織り機と、ワークショップの様子】

